

中野先生のこと

井上 大介

With Gratitude to Professor Nakano

INOUE Daisuke

創価大学に34年間在職された中野毅先生が2018年3月をもってご退職されることとなった。中野先生は1947年に茨城県水戸市に生まれる。県立水戸第一高等学校、東京大学文学部西洋史学科を卒業された後、故井門富二夫先生（筑波大学名誉教授）のもと、筑波大学大学院博士課程哲学思想研究科（宗教学・比較思想専攻）において宗教社会学を学ばれた。学生時代は、東大紛争の渦中であり、学生運動にも積極的に参加した経歴をもつ。

研究領域は、宗教社会学をベースに、国家・政治、ナショナリズム、グローバル化と宗教との関係、災害や危機に宗教学や社会科学が、そして宗教がいかなる役割を果たせるのか、等の研究に従事した。職歴としては、創価大学文学部教授のほか、（公財）国際宗教研究所評議員、国際宗教学宗教史学会議19回世界大会実行委員、日本宗教学会理事、（公財）東洋哲学研究所理事・主任研究員、創価大学社会学会長などの要職を務められてきた。

元日本宗教学会会長である島菌進先生（元東京大学教授、現上智大学グリーンフケアセンター所長）、國學院大學教授である井上順孝先生、筑波大学教授である山中弘先生など第一線でご活躍されている宗教研究者との交友関係は広い。

1988年には、イギリス・オックスフォード大学・オール・ソウルズ・カレッジに在外研究で滞在し、セクト論や世俗化論を柱とする宗教社会学の世界的権威であった故ブライアン・ウィルソン先生（元国際宗教社会学会会長／元オックスフォード大学教授）に師事され、ウィルソン氏の『タイム・トゥ・チャント』を翻訳されるなど、欧米の宗教社会学と日本社会の学術的接合に貢献された。

私は1990年4月に創価大学文学部社会学科の20期生として入学し、中野先生と出会い、3、4年次にはゼミの指導教官として宗教社会学を教わった。

当時はピーター・バーガーの『聖なる天蓋—神聖世界の社会学』、ロバート・ベラーの『心の習慣—アメリカ個人主義のゆくえ』などを教材として、宗教と社会の関係性について様々な視点をご教示いただいた。

常に人情味に溢れ、夏休みにはご自宅周辺の「阿佐ヶ谷商店街」夏祭りのアルバイトを前提に多数の学生をご自宅に招待されるなど、接する人たちの日常生活にも種々配慮をされていた。その反面、学問に対する姿勢は非常に厳格で、英文書籍の要旨発表(和訳)を担当した学生が、同書の和訳文献を流用して発表していることを見破るや、烈火のごとく叱責されていたのが記憶に留まっている。私が、大学4年次にアルゼンチン国立コルドバ大学に留学する際も、先方大学との手続きが不明瞭であったため、「そんな状況で留学して本当に大丈夫なのか！君なんかは野垂れ死んでしまえ！」と厳しい叱責を受けたことを鮮明に覚えている。そのお蔭で、自身のいいかげんさ、詰めの甘さを痛感し、様々な準備を周到に重ねることができ、結果、有意義な留学を遂げることができたことを覚えている。厳しく叱ってくれる教員が少なくなっていた時期だけに、その経験は私の人生において（特に教員として働くようになった現在において）非常に貴重かつ重要なものとなっている。優しいだけの教員では、学生を育てられないという指針をその時に頂いたように実感している次第である。

また上記した故ブライアン・ウィルソン先生を創価大学に招聘され、研究者や学生に対し、大きな刺激を与えて下さった。

私は学部卒業後には、メキシコ国立自治大学の大学院人類学研究科へ進学したが、ちょうど滞在中の2001年にメキシコ（イスタパン・デ・ラ・サル）

において国際宗教社会学会第26回カンファレンスが開催されることとなり、メキシコで中野先生とお会いする機会を得た。

その際、私のメキシコでの指導教官であるカルロス・ガルマ先生(メトロポリタン自治大学社会人類学科教授)、ジョロトル・ゴンサーレス先生(メキシコ国立自治大学教授)などと懇談していただき、私の研究等について種々検討していただいた。また、同カンファレンスに参加された樫尾直樹先生(慶応義塾大学教授)、弓山達也先生(東京工業大学教授)など、当時、日本における宗教研究の最前線で活躍しつつあった日本人研究者を多数ご紹介いただいたりもした。

2008年に私が11年間の滞在を終え、メキシコから帰国し、東京・八王子の創価大学の教員として採用され、同じ教員という立場で接するようになって以降も、中野先生には研究、教育等の面で様々お世話になった。

なかでも「宗教と社会」学会学術大会、日本宗教学会学術大会という二つの行事を創価大学で開催した際には、中野先生が各大会実行委員長を務める一方、私が事務局長を務め、イベントの成功に種々尽力させていただいたが、それらを通じて、大変多くのことを学ばせていただいた。

特に日本宗教学会学術大会開催の折は、記念シンポジウムに、ホセ・カサノヴァ先生(アメリカ・ジョージタウン大学教授)、ジェームズ・バックフォード先生(イギリス・ウォーリック大学名誉教授/故ブライアン・ウィルソン先生の愛弟子)という世俗化論の世界的研究者を海外から2名も招聘するなど、学問に対する妥協を許さぬ、徹底した態度を学ばせていただいた。

大会終了後には、在職する大学でこれらの学術大会を開催することが中野先生の念願の一つであったとお聞きした。

ご自身の研究に関しても、2001年、54歳の時に、筑波大学に博士論文「戦後日本国家と民衆宗教の政治参加：宗教学的一考察」を提出され、同論文をベースとした著書『戦後日本の宗教と政治』を刊行される一方で、それまで積み上げてこられた新宗教研究の成果を著書『宗教の復権－グローバリゼーション・カルト論争・ナショナリズム』で発表されるなど、精力的な活動を展開されてきた。同著については、元日本宗教学会会長である櫻井義秀先生も日本における「カルト」研究の発展に大きな寄与をされたと述べるなど、

宗教研究において高い評価を得ている。

中野先生の研究経歴においては、「近代社会における宗教と国家・政治」(1985年)、「宗教とグローバリゼーション, ナショナリズム」(1998年)、「宗教とグローバリゼーション, ナショナリズム」(1998年)、「日本占領改革と日本宗教の変容」(2010年)など、文科省・科研費による研究成果も多数存在しているが、退職まで残り3年となった2014年には、文系としては大型の科研費を取得し、「連合国のアジア戦後処理に関する宗教学的的研究：海外アーカイブ調査による再検討」というテーマで国内外の様々な研究者とのネットワークを利用しながら、ご自身の指導教官の御一人である故阿部美哉先生(元國學院大學長)らが取り組んだ戦後日本の宗教と社会に関する研究を深化させ、新たな知見を発信され続けた。

私が2016年に、ニューヨーク市・コロンビア大学ラテンアメリカ研究所に在外研究員として1年間滞在した際にも、中野先生は訪米され、同科研に関する資料を、コロンビア大学アジア研究所図書館、アメリカ・ワシントン郊外にある国立第二アーカイブ等で共に蒐集させていただき、文献調査に関するノウハウも学ばせて頂くことができた。

教育においても中野先生はこれまで多くの研究者を輩出されてきたが、学生に対しては常に「レジリエント」な精神の重要性を強調されておられた。ご自身もその精神を体現しようとされ、博学である一方で、知らないことに関しては、学生にも質問するというように、学びに対する謙虚で柔軟な姿勢を常に意識されていたように思う。

また近年は沖縄周辺の宗教文化に関する研究および理系・文系の統合をめざす科学と宗教の関係性に関する研究も展開されつつあり、様々な刺激を頂いている。

このように、私個人においても、中野先生からは非常に多くの学恩を頂き、衷心より感謝している。多くの卒業生の皆様も同じ心境ではないかと存じている。

中野先生、これまで本当に有難うございました。先生から頂いた学問的恩恵は計り知れません。長い間、本当にお疲れ様でした。これからもどうぞお体に留意され、研究者としての人生を完結していただきたいと存じます。

また今後は、次の世代の我々が、中野先生の意味を継ぎ、宗教研究の新境地を開拓してまいります。僭越ですが以上、教え子の一人として「贈る言葉」を述べさせていただきます。

